

小さな種から育まれる 豊かな未来の担い手に

株式会社 サカタのタネ 代表取締役社長

坂田 宏 氏



卓越した育種技術で数々のオリジナル品種を生み出し、日本の種苗業界を牽引するサカタのタネ。今や世界の国々に SAKATA ブランドを提供するグローバル企業に成長。地球温暖化、食糧不足などさまざまな環境問題に直面する 21 世紀に、研究開発型企業として、世界の人々の生活文化向上に向け、さらなる挑戦を続けていきたいと坂田宏社長は語る。

さかたひろし / 1952 年生まれ。神奈川県出身。慶応義塾大学経済学部卒業。1974 年第一勧業銀行（現みずほ銀行）入行。1981 年坂田種苗株式会社（現株式会社サカタのタネ）入社。サカタ・シード・ヨーロッパ総支配人、取締役社長室長、常務取締役管理本部長などを経て 2007 年より現職。座右の銘は先憂後楽。趣味はゴルフ、テニス。

株式会社 サカタのタネ

- 所在地：〒224-0041 横浜市都筑区仲町台 2-7-1
- TEL：045-945-8800
- 創業：1913 年 7 月
- 株式会社設立：1942 年 12 月
- 資本金：135 億円
- 売上高：465 億 18 百万円（連結ベース）
- 従業員数：621 名
- 海外関係会社：アメリカ、フランス、デンマーク、ブラジルなど 20 カ国に 28 拠点
- 国内関係会社：国内に 10 社

植物と共に歩んだ 1 世紀 研究開発で魅力ある商品を開発

サカタのタネは、花と野菜の優良品種の開発に取り組んできた、研究開発型企業です。商品は種、そして植物。自然が生み出し、守りつないできた植物を、さらに人の手と技術によって育む。世界の人々の暮らしに幸せと豊かさを届けることを使命とし、約 1 世紀にわたり挑戦を続けてまいりました。

現在、日本国内はもとより、海外各地 20 カ国に事業拠点をもち、130 カ国以上の国々で SAKATA ブランドの商品を展開する当社であります。実は横浜生まれ、横浜育ちの企業です。

創業は 1913（大正 2）年、私の祖父である坂田武雄が、明治政府の農業実習生に選抜されて欧米で研修を受け、帰国後に横浜の地で「坂田農園」を設立したのが始まりです。当初は苗木の輸出業を営み、研究開発から生まれたオリジナル品種の販売へと業務を移行してまいりました。

サカタのタネの成長の礎ともなりましたのが、1930（昭和 5）年に売り出したオールダブルのペチュニア「ビクトリアスミックス」でした。それまでのペチュニアでは八重（ダブル）の花はほぼ半分しか咲きませんでしたが、当社がオールダブルを遺伝的に解明してすべての花が八重咲きになる品種を完成し、これが世界で大ヒットとなったのです。サカタのタネが世界的な知名度を持つことになる、その基礎を築いたのがまさしくこの商品でした。

戦後になると、野菜の商品開発にも力を入れるようになり、なかでも 1962（昭和 37）年に世に送り出した「プリンス」メロンは、日本では高嶺の花であったメロンを庶民に身近なものとする画期的な商品としてたいへんな反響を巻き起こしました。さらに 1977（昭

和 52）年に販売を開始した「アンデス」メロン、トウモロコシ「ハニーバンタム」なども、品種名がそのまま消費者の方々に認知されている、当社の代表的な商品といえます。

これまで数多くの新商品を開発し、世に送り出してきましたが、それこそが種苗業を営む私たちの使命。なぜなら生産者の方々にとって、種や苗は、まさに生活の基盤です。いちばんいいもの、新しいものでなければ売れない。必然的にわれわれには常に新しいもの、消費者に魅力的な商品を生み出し続けていく努力が求められるのです。また、種というのは外見だけではなかなかその商品の良し悪しを見抜くことはできません。種をまいて、一生懸命育てて花が咲いたり実がなったときに、「ああ、いい商品だった」とわかってもらえる。だからこそ信頼される商品をつくり、信頼される会社であることが何よりも大切になります。

当社の社是は『品質・誠実・奉仕』ですが、最初に“品質”があるのも、種を扱う会社だからこそ、品質をまず第一にする企業であるべきだということを強くうたっているのです。

オランダでの海外勤務で 世界の中の日本を知る

私自身は大学の経済学部で学び、卒業後は都市銀行に入行しました。正直、若い頃は種苗業界にはまったく興味はなかったのです。しかし金融業界に入り、いろいろな企業さんのお付き合いをさせていただくなかで、改めて種苗業を見つめなおしてみると、人の食や生活を支え、社会貢献できる仕事に大きな魅力と可能性を感じました。そして銀行を退職して 2 年間カリフォルニア大学で農業を勉強し、入社したのが 1981（昭和 56）年のことです。

私は入社当時から現在に至るまで、この仕事は現場第一だとい

う思いを一貫して持ち続けています。社員にも現場を知ることの大切さを伝えていますが、私自身、若い頃からよく現場を回り、生産者や一般の消費者の方々などからさまざまな声を聞かせていただきました。エンドユーザーである農家の方々と畑で言葉を交わすと、そこからさまざまな発見や勉強があります。その原点を大切にすることで、企業の未来も見えてくるのだと感じています。

転機となったのは、1988(昭和63)年から6年間、オランダでの海外勤務です。すでに1977(昭和52)年にアメリカで現地法人を立ち上げており、さらに海外でのネットワークを築くためにヨーロッパで当社の拠点をつくるのが目的でした。当時から世界ではアメリカ、日本、そしてオランダが種苗業界を牽引していました。しかもその一角であるオランダに、ライバルである日本の企業、しかもすでに戦前の「ビクトリアスミックス」で知名度のあるSAKATAブランドが飛び込んでいくのですから、当然ライバル視されます。苦勞の多いなか現地法人を立ち上げた経験は、とても得るものが大きかったですね。また日本ではちょうど昭和から平成へと時代が移り変わり、さらにバブル崩壊もあり、それを海外からの視点で見ることができました。同時にヨーロッパでは東西ドイツの統一、ヨーロッパの国々が欧州連合へと流れをつくっていく過程で、歴史の波を肌で感じることもできたことも貴重な体験となりました。

ヨーロッパのほとんどの国を回り、世界各地を見ていくなかで培われたのは、広くグローバルな視点で経営を考えるとということ、改めて当社は日本の企業であるということ。ただし、日本の基準だけで判断するのではなく、世界の中の日本という広い視点で経営を見据える姿勢を学んだことは、その後の私の経営への取り組みにも大きな指標を与えてくれたと感じています。

種も人も適地適作で グローバルに大きく育てたい

花や野菜の新たな品種を、市場に受け入れられるまでに商品価値を高めるには、長年にわたる交配と選抜を繰り返すことが必要です。開発から世に送り出すまで、通常10年以上の年月がかかるのがわれわれの商品です。先に当社は研究開発型の企業と申しましたが、こうした研究開発へのたゆまぬ努力、取り組みこそがわれわれのビジネスを支えています。

また生き物を扱う研究であればこそその大変さも数多くあります。現在、国内には北海道、千葉県、長野県、静岡県、三重県の5カ所に研究農場を持っています。これらの農場は気候や土壌などの自然環境が異なる地で、その土地に適応する育種の開発を行うためのものです。植物にとって、高温多湿で四季の移り変わりのある日本はたいへん厳しい自然環境です。こうした気候に順応できる野菜や花を開発していくことは、日本の食文化や潤いある生活を支えていくことであり、苦勞を超えたやりがい、喜びがあるのが、この仕事の素晴らしさだと思います。

グローバルな事業展開に積極的に取り組むのも創業当時の社風です。現在アメリカ、フランス、ブラジル、デンマーク、コスタリカ、南アフリカなどに研究農場・研究施設を持つほか、生産、販売のネットワークも構築しています。今後は発展するアジアに向けての市場開拓が課題であり、力を注いでいく計画です。

当社の海外事業の特徴としましては、世界各地の現地法人のトップを、すべてその国の方をお願いしていることかもしれません。植物が適地適作であるように、それぞれの国で企業が大きく育っていくためには、その土地の文化や風土をよく理解された現地の方こそふさわしいという思いがあります。

同時に国内の人材の育成という側面から、こうした海外の事業拠点に若手を積極的に研修に行かせ、経験を積ませています。語学が堪能な若手社員も多く、海外でも生き生きと活躍する姿に、当社の未来にも大きな期待を寄せています。

自然・環境との共生を目指し 21世紀の課題に立ち向かう

21世紀を迎え、地球温暖化や食糧不足といった地球規模の環境問題が浮かび上がってきました。こうした問題に対処する技術力があるのも当社の強みです。たとえば耐病性の優れた植物を開発することで農業を減らすことができます。また耐寒性を向上できれば、作物をつくる段階での暖房費の節約などにつながります。育てやすく収穫量の多い野菜が開発できれば、食料の安定供給につながります。地球規模の問題に貢献できる品種を、研究開発の段階から視野に入れて開発することも、社会からわれわれの課せられた役割と認識し、一つの大きな研究目標としています。

その具体的な成果の一つが、2006(平成18)年より出荷をはじめた「サンパチェンス」という花です。夏場の花が少ない時期に可憐な花を次々と咲かせてくれるのですが、実は二酸化窒素、ホルムアルデヒドの浄化能力や、二酸化炭素の吸収能力が他の園芸植物に比べて極めて高い「環境浄化植物」でもあります。さらに夏の暑い時期にまわりの気温を下げる打ち水効果もあります。今年の上海万博では会場内と街の中心部の大通り沿いが16万株の「サンパチェンス」で飾られました。上海の街を美しい花で飾り、心の潤いと共に環境浄化のお役にも立っているのではないのでしょうか。

小さな一粒の種にも、そこには大きな可能性が宿っています。当社も一粒ひと粒の種を大切にしながら、未来へのさまざまな可能性を伸ばしていきたい。ICT全盛の時代ではありますが、自然と向き合うわれわれにとって、企業の基本は人の力。植物の世界はアナログだと思いますが、業務としてはデジタルとアナログの融合も大切なことだと考えています。コツコツと地道ながらも、未来に向けて社会・自然・環境との共生を目指して成長していきたいと考えています。



本社屋上にて(左より)執行役員 宇治田氏、坂田社長、広報宣伝部長 清水氏

トップは語る こぼれ話はウェブサイトへ ▶

eふぁみり もあわせてご覧ください!

eふぁみり

<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>